ストレスフリーな交通を目指して

追加料金による鉄道混雑の回避

二村真理子　Mariko FUTAMURA

東京女子大学現代教養学部准教授

「理想の交通社会」とは何か？ 3月の会員合宿でわれわれの班では「極楽浄土こそ理想」と考えた。すなわち行きたいところに瞬間移動できる世界であり、漫画『ドラえもん』の「どこでもドア」の世界である。思うがまま、希少な時間を使うことなく費用もかけずに行けること、まさに究極の移動環境である。ただし、そこはハリウッド映画や漫画の中か、もしくはすでに「この世」ではなさそうである。達成しようとすれば自らの身が危うくなりそうであるから、ここは現実に立ち、実現可能な理想を掲げたい。

10年後までに考えるべき交通問題は環境、経営両面での持続可能性をはじめとして数多く存在するはずであるが、本稿では自分勝手に、私にとっての理想の交通社会として「ストレスフリーな移動を実現する社会」を考えたい。人の感じるストレスというものは高度に主観に依存するものであるし、個々人の忍耐との大小関係にも関係しそうなので、社会が目指すべき具体的な中身が一意に決まるものではない。よってこのような書き方は無責任ではあるが、少なくとも私にとっての移動ストレスが改善されていることを望みたい。

10年後は東京オリンピックが終了しており、首都圏を中心としてインフラも充実し、質、量ともに改善しているものと予想される。このインフラをさらに効率的かつ効果的に利用していくことで、ストレスを軽減していきたいものである。

具体的にいえば、私にとっての最大の移動ストレスとは混雑した電車に乗ることであり、おそらく誰もが不快に感じるであろうものである。さて、どうにかならないものか。日本はそう遠くない将来、人口減少の局面を迎えることになるわけで、もう少し余裕のある社会を夢見たい。

まずは、より快適な移動を選択できる仕組みが欲しい。抜本的に改善するためには働き方の多様化を通じた通勤需要の削減が必要であろうが、グリーン車のような追加料金が必要なサービスを積極的に活用するのも良いと思う。たとえ満席で座れなくとも、空いているデッキに立つために料金を支払う人がいるのだから、「ゆとりある乗車」に対する人々の要請は大きいものと思われる。特に混む日には料金を上げて調節をするのも良いだろう。ICカードの活用が進み、値段の設定変更が容易になったわけだから、あとは事前の情報提供等が携帯端末等に対して適切に行われれば良いわけで、道路交通で議論されているような動学的混雑料金設定のような対応が行えるはずである。10年後はもう少し、移動のための選択肢が広がった世界であってほしいと思う。

個々人のストレス要因を克服していけば、少しずつ改善された交通社会が出来上がっていくかもしれない。その際に必要とされるのはおそらく、交通そのものの技術のみならず、それをコントロールするための情報とその技術、さらにはマネージメント能力であろう。

10年後よりもさらに先の話になりそうであるが、リニアモーターカー、超音速旅客機などの次世代型の高速移動手段が実用化されるなど、今後も移動時間短縮の努力は続けられていくだろう。そのような中で移動質の改善が図られている10年後であってほしいと思う。

一橋大学大学院博士課程修了。専門は交通論、物流論、環境経済学ほか。主に「自動車交通と地球温暖化の問題」「港湾の国際競争力の問題」について研究を行っている。（会員／2011年会員就任）